

ほふく型常緑樹の生態について

斎藤新一郎（北海道立林業試験場）

北海道に自生する、ほふく型常緑樹には、次のようなものがあります。

針葉樹（裸子植物） ハイイヌガヤ*（イヌガヤ科） ハイマツ（マツ科） リシリビャクシン* ハイネズ* ミヤマビャクシン*（いずれもヒノキ科）

広葉樹（被子植物） チョウノスケソウ（バラ科） ツルシキミ*（ミカン科） エゾユズリハ*（トウダイグサ科） フッキソウ*（ツグ科） ガンコウラン*（ガンコウラン科） アカミノイヌツゲ* イヌツゲ* ツルツゲ* ヒメモチ*（モチノキ科） ヒメアオキ*（ミズキ科） イソツツジ ハクサンシャクナゲ キバナシャクナゲ ヤチツツジ ヒメシャクナゲ* シラタマノキ* コケモモ* ツルコケモモ*（ツツジ科） ヤブコウジ*（ヤブコウジ科） ツレアリドオシ*（アカネ科）〈*印は、多肉果をつける〉

これらの小型木本に、ほぼ共通してみられる生態——生活形態も含む——には、次のようなものがあります。

- 1) 母種や同属ないし同科の木本より小型であり、より北方に分布する傾向がある。¹⁾
- 2) 多雪地方に生育する傾向があり、²⁾ 保湿・保温などの利雪により越冬する。^{1), 3)}
- 3) 林床型のもが多く、⁴⁾ 耐陰性に富み、しかも上木の落葉中の春と秋に光を利用するとみられる。⁵⁾
- 4) 風散布型よりも、動物散布型の実をつけるものが多い、²⁾ いずれの果皮も鮮明な色に熟し、落葉性の多肉果木本と違い、⁶⁾ 秋に熟し、冬は積雪下において、翌春にも種子散布を行う。

上述の共通点からみて、次のような仮説が考えられる。

常緑樹が、落葉性を獲得しないままて、高緯度地方にまで進出するためには、低温と乾燥を避けるために多雪地方を選び、雪害をほふく型化して軽減し、湿潤な林床に生育して光の低木化し、しかも利用方式を変え、風散布に期待しにくいから多肉果をつけて動物散布されるようになった。つまり、ほふく型常緑樹は、落葉性を除いて、冷温帯の気候条件下に、よく適応進化したものと考えられる。 に進まなかった点

- 1) 松村義敏, 1947: 植物の越冬. 96pp., 彰考書院.
- 2) 斎藤新一郎, 1976: 苗木育成からみた樹木種子の運搬者としての鳥類の役割について. 鳥, 25: 41~46.
- 3) ——, 1981: 乾燥への適応と多雪地の樹木の生活形. 雪氷講予稿集, 556: 50.
- 4) ——, 1982: 落葉広葉樹の休眠芽の芽鱗と寒さ・乾燥との対応について. 雪氷北支講予稿集, 557: 1.
- 5) ——, スプリング・エフェメラル——春の光を利用するもの. 科学と実験, 33(4): 12~17.
- 6) ——, 1982: はないかた・まつぶさ. 北海道林務部報〈林〉, 363: 49~54.
- 7) 四手井綱英, 1971: 積雪と樹木の生活形. 雪氷, 33: 42~43.